

発 明 文 化 論

〈第 69 回〉

丸山 亮

中世の技術革新

国立歴史民俗博物館が公開 30 周年を迎えた。その企画展示「時代を作った技—中世の生産革命—」に興味をひかれ、夏の一日、佐倉の会場に足を運んだ。展示では日本のモノ作りが、早くも中世に目を見張るような成果を上げていたことが紹介されている。

たとえば漆器。日本の漆工芸は縄文時代から発達していたといわれており、時代が下ってその精巧な技は、世界に類を見ないほどの洗練に達する。中世の漆芸で注目すべきは、完成度の高いぜいたく品と並んで、大衆が求めやすい普及品が現れたことだろう。漆の代用に柿渋と炭の粉を混ぜたものを下地にして原料の節約を図り、塗の回数を減らすことで量産化を可能とした。木地も櫨から手に入れやすいブナや柃に代わる。こうした安価な漆器が出現したため、以後、土器椀の使用が減っていく。今日漆器そのものがプラスチックの代用品に代わっていく流れは、すでにこのころから始まっていたのかもしれない。

一方で、螺鈿や蒔絵を施した漆器のように技術の粋を集めたものは、やがて南蛮貿易で輸出されるまでになる。そしてこれが、国際分業によって成り立っていたことも、次第に明らかとなった。展示品の、西洋風櫃や筆筒はもっぱら輸出用で、その原料となる黒漆は東南アジアで採取されたものらしい。黒漆の輸入記録が朱印船やオランダ船関係の文献にあるといい、また鍵や錠前などの部品は、中国製と推定されている。原材料の一部は海外に頼って輸入品を用い、それを利用して高度な加工を行うといった、現代に通じる分業がここにみられる。

共通の資源を利用し、技術が関連するものが近傍に集められて生産基地を形成する、一種のコンビナートも中世に現れている。新潟県北部の五頭山麓にある 13 世紀前半の北沢遺跡からは、陶器窯と並んで砂鉄を利用した製鉄炉や木炭窯が合わせて出土している。陶器窯のあるものは、使用済みの木炭窯を半分ほど埋めて再構築したものである（展示カタログ）。こうした生産拠点の複合は海岸にもある。茨城県東海村の村松白根遺跡は、製塩のほか、動物の骨角や皮革の加工、さらに永楽通宝の鑄造工房が一カ所に集められていたことを示す。

これらの技術を支える職人は、どんな生活を送っていたのだろうか。寺社の造営を取り仕切った大工の職が、番匠と呼ばれる大工の掟を定めた文書が展示されている。寛正 7（1466）年の「宇佐宮寺御造管間掟書」には「番匠毎日出卯時、戌始に可帰事」の一条が読める。番匠の出勤は毎朝 6 時、帰りは夜 7 時というものだ。また、遅刻、早退は賃金が 10 文差し引かれるなどの条もあり、集団の就業規則が当時どのようなものであったかをうかがい知ることができる。

鍛冶屋のような職人が不動明王など、特定の神仏を信仰していたことも示されている。西欧の職人たちがカトリックの守護聖人を持つようなものだろうか。たとえば漁師やパン屋はペテロを、音楽家はチェチリアを守護聖人とした。京都の吉田神社の境内には、和菓子職人たちの祀る社がある。このように職人が同じ信仰の対象を持つ伝統は、今日にも受け継がれている。

展示のうちでひときわ目を引いたのは、鉄砲の国産化を示す一角だ。中国由来の銅銃は永正 7（1510）年、日本に入ってきたといわれるが、普及することはなかった。それが天文 12（1543）年、種子島に漂着した倭寇の頭目、王直の船に乗っていたポルトガル人から購入した鉄砲を当地で国産化しようとしたことから、いっせいに広まった。種子島の刀鍛冶が外形を模倣したものをまず作ったが、底をふさぐ尾栓はすぐには真似られず、翌年、南蛮人の再訪を待って教えを乞うほかなかった。けれどもいったん学習した技術は紀伊、堺、近江などに伝わり、じきに戦国大名の注文に応じられるまでになる。その吸収の速さが注目されるのである。

（まるやま りょう 共生国際特許事務所 弁理士）